

9月10日(木) 研究発表第5室(16号館305)

オリジナルテキスト"AN AMERICAN in KAGOSHIMA"で学ぶ異文化コミュニケーション

Cross-Cultural Communication

Studied through an Original Textbook, *AN AMERICAN in KAGOSHIMA*

鹿屋体育大学 社会文化学講座 宮下和子

1. 目的

「国際化」から「グローバル・コミュニケーション」の時代に入り、大学の英語教育も新たな期待感と厳しい試練の最中にあるように見える。特に、大学から教養部が姿を消しつつある現状のもと、一般英語のあり方も問われている。従来のテキストが、一般的にいつて欧米人によって書かれたものであることを考えるとき、たとえその題材が日本や日本文化を扱ったものであるとしても、「発進英語」を目指す学習者にとっては多少の距離と違和感が感じられるであろう。「日本人は英語が話せない」という要因の一つとして、日本語でのスピーチやディベートの経験不足と平行して、自分に身近な環境や自文化についての認識不足もあるような気がする。

「足元からの国際化」と草の根の異文化交流を目指して前任校で作成した手作りテキスト、「AN AMERICAN in MIYAZAKI」(『宮崎のアメリカ人』)は、そのローカルな舞台設定にもかかわらず学生から大きな支持が得られ、途中登場人物の一人でSeattle滞在のRobと学生との手紙によるコミュニケーションを経て、最終的には学生作イラスト入りの改訂版までを生み出すに至った。さらに昨年9月、著者の鹿屋体育大学への移動時においても同テキストを導入したところ、学生から期待以上の歓迎を受け、と同時に、本学のオリジナル版の作成も強く要望された。学生のコメントにはまた、現在の立場に於て自分の意見を持ち、さらに言語化することの重要性と必要性を認識したことも述べられていた。

以上の前提条件を基に、新任校での新カリキュラムのもとでの新たなチャレンジを目指し、オリジナルテキストにとりかかることにした。

2. 仮説

上記を受けて進めたテキスト作りを通していえるのは、学生が英語の授業を、単に単位修得のための科目としてではなく、自分の学生生活を客観的に見つめ、率直に自己表現する楽しいクラスワークの場として価値づけられるということであろう。身近な環境を描写したテキストにおいてはその登場人物に対しても、日本人の若者には自然に同化し、また外国人との異文化コミュニケーションにもごく当り前のものとして前向きに臨めるであろう。

赴任して半年、現在のスポーツ界がいかに「国際的」で、もはやグローバルな視野無しには語れないかを思い知らされている。英語を専門にしないどころか、これまで英語オンチだった学生のほとんどが、将来の日本スポーツ界を担う社会人へのパスポートとして、実用的な英語力の習得を、程度の差はあれ目指している。学生を主人公とするオリジナルテキストで疑似体験する異文化コミュニケーションを通して、彼らが自分への自信と今後の指針を得られるであろうことは否めない。

3. 方法

"AN AMERICAN in KAGOSHIMA" (『鹿児島のアメリカ人』 啓隆社出版)は、鹿児島県鹿児島市は本土最南端に位置する小さな国立大学と鹿児島の風土と歴史を舞台に、アメリカ人Robと日本の若者との異文化コミュニケーションをわかりやすい英語で描いたものである。眼下には波穏やかな錦江湾、対岸には真紅の夕陽をバックに一際優雅なシルエットを描く開聞岳を臨む、豊かな自然に恵まれたキャンパスでの会話。第二次世界大戦中の特攻隊員の写真や遺品を陳列した史料館で、過去の戦争の深い傷跡に遭遇し無言でたたずむ日米の若者。休みなく噴煙をあげ続ける桜島に、遠く故郷を思うRob。彼を案内しながら、懸命に薩摩や日本の歴史を説明する日本の若者。日本や日本人への理解を深めるうちに、祖国アメリカの良さを客観視し始めるRob。その兄の手紙に、アメリカ国内の日本と日本文化への高まる関心を知らせる妹Evaの返信。一見ローカルな背景にのみこまれそうになりながら、日本とアメリカの若者のコミュニケーションは、次第にグローバルな世界に生きる地球市民としての目覚めに彩られていく。また、体育大学という性格上、武道の一つである「示現流」と、スポーツや踊りにおける型について日本と欧米の捉え方の相違を扱った「型破り」という章も加えた。

鹿児島版の原稿も、宮崎版同様に太平洋を渡り、ペンシルベニア州立大学の恩師Mrs. Joanne Smithによるブルーフリードと、彼女との異文化コミュニケーションを経て、著者の手元に戻ってきた。そして今回も、Mrs. Smithがこれまで学習した「日本学」の知識がふんだんに盛り込まれた第13章を伴っての帰国であった。また、原稿の随所に盛り込まれたコメントには、スポーツ選手育成に対する日米の相違や、現在の米国のマスコミを賑わし続けている日本についての対照的なニュースなど、実際の授業に際しての多くの示唆を与えるものが含まれていた。

なお、各章とも詳細なNotes、Vocabulary、Comprehension Questionsを付し、内容に沿った写真やイラストも添えた。

4. 結論

1991年4月、台湾は台南市の国立成功大学(National Cheng Kung University)で開かれた「第三回国際異文化交流学術会議」に参加して強く感じたのは、「アジアの縮図日本」であった。同時に、「経済大国日本」だけが一人歩きをし、自己のPRには余りにもお粗末な祖国のイメージだった。

世界はいま、人種や国籍を越え、宗教もイデオロギーも超越したグローバル・コミュニケーションの時代に入っている。なにも海の向こうの話ではない。ここ日本のいま自分のいる所で、身近な人を無視せずに日本人、欧米人、アジア人などに関係なく、同じ地球市民として対等に対話する努力が求められている。それは決して肩肘張ったものではなく、単に理念的でもなく、しなやかでリラックスした、新しい自己の発見につながるようなハッピーなものであろう。ちょうどそれは、『鹿児島のアメリカ人』の登場人物が、明るく気楽に、それでいて結構自分らしさを出しながら前向きにコミュニケーションに取り組んでいるように、だれもが今日からチャレンジできる異文化コミュニケーションへの第一歩である。

"AN AMERICAN in KAGOSHIMA" に対しての学生の反応、及び、教育的効果については発表時に具体的に述べるが、現時点での期待は尽きない。最後に、このようなテキスト作りが他の大学でも試みられることを提案したい。

9月10日(木) 研究発表第5室(16号館305)

(ハント・アウト用)

1. テキストのCONTENTSと概要

1. Trip to Kanoya City [都城(宮崎)から鹿屋体育大学までの国道ドライブ中の会話]
2. Campus Tour [鹿屋体育大学建学理念と施設、学生構成と卒業後の進路をめぐる会話]
3. Looking around Kanoya City [城山からの市内展望と鹿屋の歴史をめぐる対話]
4. At the Historical Museum(史料館)[特攻隊員の母親との対話と、辞世の句鑑賞]
5. Rob's letter to Eva [桜島の降灰、ロブの感じる日本の神秘性と客観的な米国観]
6. *Katayaburi*(型破り)(Breaking away from the Form)[日米の野球ピッチャーの投球フォーム、日本舞踊と西洋のダンスの自己表現の違いに象徴される日米の文化比較]
7. Trip to Kagoshima City by Way of Mt. Sakurajima: Volcano [桜島観光、島を陸続きにした大噴火をめぐる展望台と土産店での対話、人文字での記念撮影]
8. Iso Park and Board Sailing [庭園鑑賞、薩摩と島津家の歴史とウィンドサーフィン]
9. Hiramatsu Shrine by Kinko bay [島津家由来の神社での願かけ参拝とおみくじ談議]
10. *Jigenryu*(示現流)[示現流の由来、薩摩同化にいたる過程の説明と練習の実体験]
11. The Monument to Satsuma Youth(若き薩摩の群像)[幕末薩摩の歴史的役割と海外観]
12. Eva's letter to Rob [エバの大学進学思索、日本人ペンパル探しの依頼と訪日願望]
13. Phoebe's Letter to Cousin Rob--from Penn State Harrisburg--
[ペンシルベニア州立大学の留学生事情、住宅の新ライフスタイルと高まる日本への関心]

2. 学生へのアンケート調査とその結果 (Chapter4の前半終了後、実施)

鹿屋体育大学の学生100名に行ったアンケート調査(無記名)の内容と結果(順序並替え)

1. 教科書に親しみを感じますか。(該当するものを幾つでも選んでよい。以下同じ)
感じる(73) 普通(24) 感じない(3)
2. 内容について、どう思いますか。
ためになる(49) 面白い(20) ニク(15) 変わってる(14) 楽しい(13) つまらない(7)
その他(記述式): 普通(4) 身近(2)
3. 使われている英語について、どう思いますか。
普通(46) 難しい(32) 実用的(16) 読み易い(11) 会話が面白い(2) 楽しい(0)
4. Notesについて、どう思いますか。
役に立つ(50) 普通(26) 物知りになる(20) 面白い(5) 興味無い(5) 不必要(0)
5. Vocabularyについて、どう思いますか。
役に立つ(43) 普通(30) 充分(12) 不十分(11) 不必要(4)
その他(記述式): 発音記号も加えてほしい(2) 親切(1)
6. Comprehension Questionsについて、どう思いますか。
普通(63) 役に立つ(18) 別の問題も(5) 難しい(5) 容易(4) 役に立たない(3)
7. 日本の地図とアメリカの地図について、どう思いますか。
良い(45) 普通(29) とても良い(20) 不必要(7)

8. 挿絵や写真について、どう思いますか。

もう少しほしい(55) 良い(29) 楽しい(7) 面白い(6) 不必要(4) 役に立つ(3)

9. テキストの、どういう点が気に入りましたか。(記述式)

身近で親しみ興味わく(73) わかりやすい(12) 観察が鋭い(5) 先生自作(2)

表紙(2) 活字の大きさ(2) 丁寧(2) 文化比較(1) 生きた英語(1) 飽きない(1)

10. テキストの、どういう点を改善すべきですか。(記述式)

英語を易しく(10) ローカル過ぎる(4) 挿絵(4) 価格(4) 誤字(3) 余白必要(3)

アメリカの記事(2) 外国の登場人物を増やす(1) 章を減らす(1) 各章を短く(1)

11. その他、テキストについての感想を述べて下さい。(記述式)

わかりやすく良い(17) 鹿屋に詳しくなる(7) 身近すぎて学んでいる気がしない(2)

先生の学識の具体的な内容(2) 大学生らしい(1) 先生自作で先生が授業(1)

3. 分析

32名が使用英語を難しいと指摘しているが、全学生の約4割が推薦入試入学者という状況下、学生間に基礎英語能力のばらつきがあるのは確かである。第4章途中でのアンケート調査の実施でもあり、現時点での学生のテキスト観が、人口78,000人の地方小都市鹿屋市と大学案内に彩られたローカル描写という印象は否めない。テキストに対する学生の正確な評価と教育効果を確かめるには、学年末実施予定のアンケート再調査が待たれる。

しかし、学生の7割強がテキストに親しみを感じると答えており、同時に、同数の学生が「身近な話題であるため興味がわく」と、教材の長所として取り上げていることは興味深い。また、約6割が九州出身者とはいえ、日本全土から集まった学生の多くが、大学の所在地や地元に関する知識の必要性を認識していることが、Notesについて半数が「役に立つ」と回答していることからもうかがえる。ここから各々の出身地に対する知識欲と身近な異文化コミュニケーションへと興味が広がるような、普遍的な波状効果が期待される。

4. 反省と展望

半数以上の学生からの「挿絵や写真を増やしてほしい」という要望は、視聴覚教材の果たす重要な役割と必要性を証明している。第一作のAN AMERICAN in MIYAZAKI(1989年4月初版、90年改訂版、91年三訂版)には、音響効果入りのカセットテープを製作し、テキスト使用の学生や一般の人々に歓迎された。今回は赴任早々で可能性は未知数だが、できればカセットテープの製作を実現させたい。LL教室での授業という利点もあり、音声的にも学生をテキストに接近させ、教室内外での教育効果を高めることは可能である。

製作は、日英両言語ソフト[DUET]を使用したコンピューター作業で行い、原稿入りのフロッピーディスクを出版社に送った。時間の制約上、発音記号記載の配慮不足は学生の指摘通りである。オリジナルな手作りだけに、丁寧な教育的配慮を盛り込めるだけの時間的余裕は必要条件である。誤字脱字の訂正をも含んだ改訂版に、その反省を生かしたい。

英語教育を通して「日米の異文化コミュニケーション」について学生と学びつつ、激動激変し続ける世界情勢の渦中であって、「アジアとの共存あつての日本」に数年来執着している。「世界の縮図-アメリカ」に向き合うには、「アジアの縮図-日本」のアイデンティティが日本人一人一人に問われているというのが、第三作へのテーマと展望である。